

# 新庄城と戦国時代の越中

戦国時代は、応仁の乱（1467～77年）をきっかけに始まりました。戦乱は全国に拡大し、越中（富山県）でも守護・守護代・在地勢力・一向一揆勢力などが、各地で戦いを繰り返しました。

今回のミニ企画展では、戦国時代前期（15世紀中頃～16世紀前半）の越中の時代背景をふまえて、新庄城の歴史を紹介します。



## 1 新庄城の立地と歴史

新庄城は、戦国時代の平城（平地に築かれた城）で、城跡の一部は、現在の富山市立新庄小学校（富山市新庄町一丁目）の構内にあたります。常願寺川中流左岸の標高13～14mの微高地上に立地し、古くから「御屋敷山」と呼ばれた小高い丘でした。また、旧北陸街道沿いの要衝に位置します。

文献史料で「新庄」の地名が最初に確認できるのは、永正17（1520）年の新庄の合戦を記したものです。この合戦では、越後守護代長尾為景と越中守護代神保慶宗が戦いました。この時、長尾方が新庄に築いた臨時の城郭が、のちの新庄城のはじまりと考えられます。

文献史料にあらわれる新庄城は、天文年間（1532～55年）に神保方の三輪飛騨守が築城したと伝わります。その後、椎名方の轡田備後守や井上肥後守が城主となりました。元龜2（1571）年に上杉氏に攻められ落城し、上杉方の鯨坂長実が城主となりました。翌3年の「荒川尻垂坂の合戦」や天正6（1578）年の「地藏堂東坂口の合戦」では、上杉氏の拠点となっています。天正8年以降は、織田方の重要な支城となりましたが、天正11年に佐々成政によって越中が平定された後、新庄城に関する文献史料は確認できなくなります。その後、江戸時代になると城跡周辺は加賀藩領域となり、加賀藩の蔵が建てられました。



新庄城跡（新庄小学校の構内）



堀（1-SD05（左）：新庄城Ⅰ期、1-SD04（右）：新庄城Ⅱ期）、土塁（1-SA01（中）：新庄城Ⅰ期）の発掘状況



出土した様々なやきもの（新庄城Ⅰ～Ⅳ期）

## 2 発掘調査からみる新庄城の姿

### ・新庄城0期（飛鳥・白鳳時代～平安時代、7～10世紀）

飛鳥・白鳳時代～平安時代（約1,300～1,100年前）の集落が存在していたことがわかりました。出土品には墨を磨る円面硯があり、文書を作成する公的施設の存在が考えられます。

### ・新庄城I期（室町時代、15世紀前半）：新川郡守護代・椎名氏関連の館か

この時期には、館が存在していたことがわかりました。堀（幅2.5～3.5m、深さ1.0m）や土塁（幅2.4m、高さ0.8m）で囲まれており、その中から中世土師器や青磁（中国産）の碗などが出土しました。新庄の周辺を支配していた有力者が居住していたと考えられます。

### ・新庄城II期（戦国時代、15世紀中頃）：「国中錯乱」を機に改修か

I期の館が城郭に造り替えられました。応仁の乱前後に堀や土塁を大型化し、防御性を高めたと考えられます。堀（幅5.0m、深さ1.45m）、土塁（幅4.7m、高さ0.65m）などが確認されました。堀からは、中世土師器のほか、青磁の碗、珠洲焼の鉢などが出土しました。

### ・新庄城III期（戦国時代、15世紀後半～16世紀前半）：「明応の政変」の影響か

II期で城郭に造り替えられた後、堀や土塁を改修したと考えられます。郭は、堀・土塁の北側にあったと考えられます。改修の要因には、明応の政変や永正三年一向一揆などの影響があったと推測されます。堀からは、珠洲焼の鉢などが出土しました。

### ・新庄城IV期（戦国時代、16世紀前半）：神保氏に対する城か

長尾為景が「新庄の合戦」の際に構築した臨時の城郭と考えられます。堀（幅6.0m、深さ1.8～2.0m）が確認されました。堀は水堀として機能していました。堀の北側に少なくとも2郭以上の郭がある、複郭式の平城であったと推測できます。

堀からは、陶磁器（中世土師器・青磁の碗など）、木製品（漆碗・下駄・曲物など）、土製品（鞆羽口など）など多くの遺物が出土しました。新庄城跡では、精錬鍛冶工房跡が数カ所確認され、合戦などに際して、武具の製造や修理などが行われていたと考えられます。

### ・新庄城V期（戦国時代～江戸時代、16世紀中頃～19世紀）：富山城に対する城か

IV期で確認された城郭全体が大規模な盛土造成によって埋められ、新たに堀や井戸を作るなど大規模な改修が行われました。これが文献史料にあらわれる新庄城と考えられます。この時期の堀から19世紀代の遺物が出土していることから、堀は江戸時代にも残っていたと考えられます。



新庄城IV期の堀（1-SD200：16世紀前半）、多くの遺物が出土しました。新庄城I～IV期中世土師器

### 3 戦国時代前期の越中の時代背景

#### (1) 15世紀前半までの越中の様相 (新庄城Ⅰ期)

南北朝時代、康暦2 (1380) 年に畠山基国が越中守護に就任します。以後、畠山氏が越中守護職を世襲しました。畠山氏は管領であったためほぼ在京し、越中には赴任しませんでした。そのため、重臣の遊佐氏が砺波郡守護代を務めて、越中全域も束ねました。

嘉吉の乱 (1441 年) で6代将軍足利義教が討たれると、越中の状況は一変します。義教と親しかった遊佐氏の勢力が衰え、代わって畿内の畠山氏領国の守護代として台頭していた、神保国宗が越中の射水・婦負郡守護代に登用されます。国宗は、放生津 (射水市) を本拠地としました。また、基国により新川郡守護代に在地勢力の椎名氏が登用されます。以後、越中は神保氏・遊佐氏・椎名氏の三守護代家によって統治されることになりました。

**【用語解説】**  
 管領…将軍の補佐役  
 守護代…守護に代わり領地を治める役

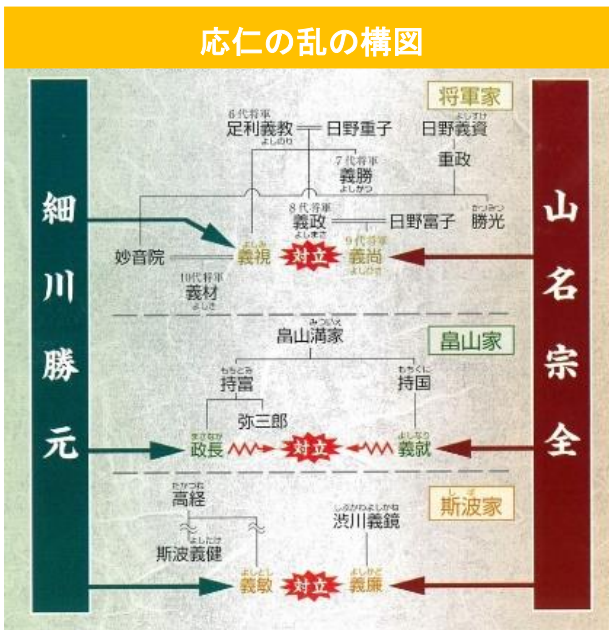


富山市郷土博物館 2007『富山城ものがたり』に加筆

#### (2) 国中錯乱～応仁の乱 (新庄城Ⅱ期)

室町時代の文安5 (1448) 年、京都では、畠山持国が弟持富から実子の義就へ後継者を変更し、畠山氏家中で後継争いが起きます。越中三守護代家は弥三郎 (持富の子) を推し、義就派と対立しました。享徳3 (1458) 年、弥三郎派の神保国宗に対し、義就方は越中へ軍勢を派遣します。義就方の軍勢は、放生津の神保館を襲撃するなど、「国中錯乱」になりました。

弥三郎の死後、越中三守護代家は、弟畠山政長の下に結束し、義就派と対立しました。応仁の乱で神保長誠 (国宗の子) は、京都で政長と共に戦います。



地図で知る戦国編集委員会 2011『地図で知る戦国 上巻』より

#### (3) 明応の政変 ～永正三年一向一揆 (新庄城Ⅲ期)

応仁の乱後の室町幕府では、畠山政長が管領として、足利義材 (足利義視の子) を10代将軍に就けます。政長は、明応2 (1493) 年に河内の畠山基家 (義就の子) 討伐へ向かいます。その間に細川政元 (勝元の子) はクーデタを起こし、足利義澄を将軍に就けます。この事件を「明応の政変」といいます。政長は戦死し、義材は捕えられます。

神保長誠は義材を放生津に迎え、小幕府 (義材は越中公方と呼ばれる) を形成します。義材は明応7年に上洛作戦を実行しますが、細川軍に敗れて周防 (山口県) の大内氏のもとに逃れました。

放生津には、京都から武士のほか公家や文化人が多く訪れたため、新庄城の出土遺物には、京都の影響を受けたとみられる中世土師器がみられます。

紀伊の畠山尚慶（政長の子）、越中の神保慶宗（長誠の子）らは、足利義材の下で反細川政権包囲網を形成します。細川政元は、親しい関係にあった本願寺の加賀一向一揆衆に越中攻撃を依頼します。永正3（1506）年、加賀一向一揆衆は越中を急襲します。神保慶宗ら越中守護方は、越後や飛騨へ逃れました。この事件を「永正三年一向一揆」といいます。一向一揆の勢力拡大を恐れる越後守護代長尾能景は慶宗らを支援します。長尾勢は一向一揆勢を駆逐し、神保氏と椎名氏は所領を回復します。一方、能景は芹谷野（砺波市）で戦死し、越後勢は引き揚げます。

#### （４）新庄の合戦

##### ～神保氏・椎名氏の抗争（新庄城Ⅳ期）

永正三年一向一揆後、神保氏は一向一揆方と姻戚関係を結びます。そのため、守護畠山尚慶と対立することとなります。尚慶は神保慶宗の討伐を長尾為景（能景の子）に依頼します。

永正17（1520）年、為景は新庄城に拠ります。慶宗は攻撃しますが敗れ自害し、為景は新川郡守護代となります。

大永元（1521）年に一向一揆方が蜂起し、為景は越中に出兵します。大永3年に和睦が成立し、永正三年一向一揆以来の抗争は決着しました。しかし、新川郡支配だけが公権力支配の効力を持ち、その他の地域は統治上の空白状態となりました。

天文11（1542）年に長尾為景が没します。神保長職（慶宗の子）は、為景の死を機に越中国屈指の大規模荘園である、太田保に進出し、翌12年に富山城を築城します。長職の動きに椎名氏は、長尾氏に助けを求め、能登守護畠山氏が調停し長職方を認めます。

#### （５）上杉謙信の越中進攻とその後（新庄城Ⅴ期）

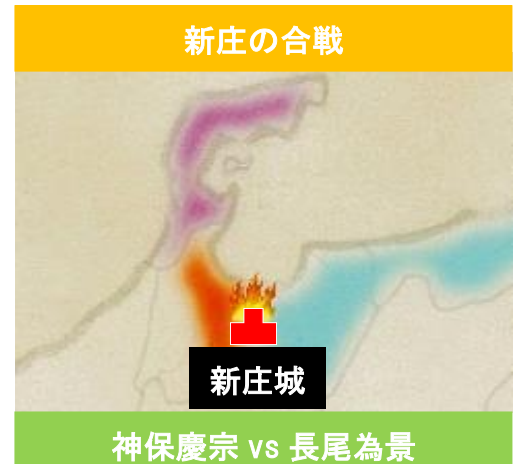
神保長職による神保家再興は、在地の武士に影響を与え、「越中大乱」を招きます。椎名氏は、新川郡内の神保氏勢力拡大に反発し、越後の長尾景虎（上杉謙信）に長職討伐を依頼します。謙信は越中へ進攻し、長職や一向一揆と戦いますが、謙信の死を契機に織田勢が進出し、佐々成政によって越中は統一されます。

## 4 おわりに

新庄城が文献史料上で確認できるのは、16世紀前半です。しかし、新庄城での発掘調査によって、交通の要衝である新庄の地には、文献史料にあらわれる以前の古代に公的施設が存在し、その後、室町時代（15世紀前半）に有力者の館が置かれたことがわかっていました。さらに、その館は何度も改修を重ね、城郭へと造り替えられ、最後には文献史料にあらわれる新庄城となったことが明らかとなっています。

今回、越中戦国史の動向を改めてみていくことで、新庄城が「新庄城Ⅰ期」から「新庄城Ⅴ期」へと、何度も改修を繰り返したそれぞれの要因がわかってきました。このように、改修を繰り返した新庄城は、室町時代から戦国時代にかけて様々な武将が拠る、越中国内支配の重要拠点と位置付けられていたことを物語っています。

今後、大量に出土した遺物の検討を重ね、さらに新庄城の姿を明らかにしていく必要があります。



富山市郷土博物館 2007『富山城ものがたり』に加筆